

Title	エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題
Sub Title	Eduard Bernstein and the Jewish question
Author	勝又, 章夫(Katsumata, Akio)
Publisher	三田史学会
Publication year	2015
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.85, No.1/2/3 (2015. 7) ,p.261(261)- 294(294)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	文学部創設125年記念号(第2分冊) 論文 西洋史
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0261">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20150700-0261</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

## エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題

### 勝 又 章 夫

#### 一 はじめに

マルクス主義者の多くがユダヤ人に対して否定的な発言を繰り返していたことはよく知られている。一八四四年の『独仏年誌』に発表された論文「ユダヤ人問題によせて」において世俗のユダヤ人と「ぼろ儲け」を同一視したカール・マルクスは、「ユダヤ人の社会的解放はユダヤ教からの社会の解放である」と主張し、フリードリヒ・エンゲルスも東欧ユダヤ人の言語を「墮落したドイツ語」と呼んでいる。<sup>(2)</sup> ドイツ社会民主党の理論家カール・カウツキーは、中世ヨーロッパの自然経済社会において貨幣経済を代表したユダヤ人は民族というよりも「カースト」であると主張し、<sup>(3)</sup> オーストロ・マルクス主義の論客オットー・バウアーも、イディッシュ語を教育

言語とするユダヤ人学校の設立という要求に対して、「このような学校を支配するのはどのような精神であろうか」と述べて、嫌悪感を露にした。<sup>(4)</sup> ユダヤ人に対するこのような発言は枚挙に暇がない。近代社会主義には「反セム主義の伝統」があるというエドムント・ジルバーナーの主張も説得力を持つように見える。<sup>(5)</sup>

もちろん今日ジルバーナーのテーゼは厳しい批判を受けている。とりわけ問題とされたのはユダヤ人に対する「非友好的な態度」<sup>(6)</sup> さえ含まれるほど曖昧な反セム主義の定義である。シユロモ・ナアマンによれば、反セム主義は「ユダヤ人解放の法的、社会的、経済的成果の廃止を目標」とする運動と定義すべきであり、<sup>(7)</sup> それは伝統的なユダヤ人嫌いから概念的に区別されなくてはならない。しかしジルバーナーのテーゼはこのような区別を欠いた

「汎反セム主義」に基づいており、「一面的で支持できない」という<sup>8)</sup>。ロバート・ウイストリッチのように、ジルバーナーを継承しようとする者もいるが、社会主義者がユダヤ人に投げかけた否定的な発言は、ジャック・ジェイコブズが主張しているように、やはりそれぞれ固有の背景から理解されるべきであると思われる<sup>9)</sup>。

それ故、ユダヤ人に対する社会主義者の態度を単純な定式のうちに包摂することはできないが、ユダヤ人に対するエドゥアルト・ベルンシュタインの好意的な態度は、際立っているように思われる。ベルンシュタインは、「半世紀に渡って反セム主義の問題に継続的に取り組んだ唯一の党指導者<sup>10)</sup>」であつただけではない。晩年にはユダヤ人の政治的自立を支持し、一九一八年の草稿において彼は、ユダヤ人の民族自治を拒否したパウアーとは正反對に、個人原理に基づく民族自治がユダヤ民族運動と両立し得ると述べている<sup>11)</sup>。一九二九年、パレスチナ・アラブ人の反乱を契機として行われた論争においても彼はユダヤ人の側に立とうとする。この論争において、ユダヤ人がパレスチナに関して要求する歴史的権利は薄弱であると主張したカウツキーに対して、ベルンシュタインは「職人、農民、それどころか重労働者」として働くユ

ダヤ人のために「公的」法的に保障されたユダヤ人の故郷」の創設を要求した<sup>12)</sup>。さらに、八十歳の誕生日を目前にしたベルンシュタインは、ナチスの脅威に直面して、「ポアレ・シオンの運動に参加することは私の義務である」とさえ述べたという<sup>13)</sup>。確かに、ナアマンが指摘しているように、シオニストの指導者たちは「彼の『シオニズム』をとてつもなく過大に誇張し、宣伝に利用」してきたとはいえ、ユダヤ人問題に対するベルンシュタインの態度の独自性は彼自身の言葉からも明らかであろう。

このようなベルンシュタインの独自の立場は、研究史においてしばしば、ユダヤ人としての彼の出自から説明されてきた。例えば、ウイストリッチによれば、ベルンシュタインの態度を決定していたのは「自由主義的ユダヤ人の遺産」だという<sup>14)</sup>。またルトガー・ハイトは、反セム主義が凶暴性を増大させるにつれて、「ベルンシュタインは自らのユダヤ的根源に回帰した」と主張している<sup>15)</sup>。確かにこのような側面を無視することはできないかもしれない。しかし、ユダヤ人社会主義者はベルンシュタインだけではないし、彼らの多くは、彼らがユダヤ人であるが故にかえって、ユダヤ人に対して冷淡であつた。そうだとすれば、ベルンシュタインの立場はむしろ彼の独

自の思想、すなわち修正主義に基づいていると考えられるべきではないだろうか。

ユダヤ人問題に対するベルンシュタインの態度と修正主義の関係を明らかにするためには、民族問題に対する彼の態度と比較されるべきであると思われる。ローザ・ルクセンブルクとカウツキーを中心としたポーランド問題討論において、ベルンシュタインは彼らと根本的に異なる立場を取っていたからである。ユダヤ人問題と民族問題に対する彼の対応に共通の論理を見出すことができらば、ユダヤ人問題における例外的立場も「自由主義的ユダヤ人の遺産」や「ユダヤの根源への回帰」ではなく、根底において修正主義に基づいていると言えるだろう。

ユダヤ人問題と民族問題に対するベルンシュタインの態度を修正主義から説明するということは、この領域におけるマルクス主義の立場に対する修正主義の批判を明らかにすることでもある。周知のように、マルクスとエンゲルスはユダヤ人だけでなくスラヴ系諸民族に対しても否定的な発言を繰り返している。一八四八年革命期にチエコ・ナシヨナリズムに直面したエンゲルスは、チエコ人は「固有の歴史」を持たず、従って自立するために

必要な「生命力」を欠いた「歴史なき民」であると主張した<sup>19</sup>。マルクスとエンゲルスのこのような姿勢が彼らの基本思想に基づいているとすれば<sup>20</sup>、それに対するベルンシュタインの批判にはマルクス主義そのものに対する批判が含まれているはずである。

このような問題提起に基づき、以下の論考では、一八七〇年代、ドイツに成立した反セム主義とそれに対するドイツ社会民主党の対応を背景に、ユダヤ人問題に対するベルンシュタイン独自の立場を浮き彫りにし、それが修正主義に由来することを明らかにしたい。

## 二 ドイツにおける反セム主義の台頭

ドイツのユダヤ人は、およそ九〇年にわたる「ユダヤ人解放の時代」<sup>21</sup>の成果として、ドイツ帝国の樹立とともに解放されていた。しかしユダヤ人解放が形式的に実現された後も、解放されたユダヤ人はなお単なる「宗派以上のもの」と映っていた<sup>22</sup>。ハインリヒ・フォン・トライチュケがユダヤ人は「ドイツ人になるべきである」と主張し、ヴィルヘルム・マルがユダヤ人を「国家にける国家、社会における社会」<sup>24</sup>と看做したのはそのためである。それでは反セム主義者によってこのように特徴づけられ

たドイツのユダヤ人とはどのような存在だったのだろうか。

ドイツ帝国が樹立された一八七一年、ドイツには約五十一万二千人のユダヤ人が存在し、総人口の約一・二五%を占めていた。ユダヤ人は出生率の低さと移民による人口流出のために、総人口の増加と歩調を合わせるこゝとができず、一九一〇年には、総人口に占めるユダヤ人の割合は〇・九五%にまで低下している。しかしユダヤ人は都市への集中傾向を見せる。プロイセンはポーゼン(ポズナニ)などユダヤ人人口の多い旧ポーランド領を併合していたが、極度の貧困に苦しんでいたポーゼンのユダヤ人は、一八四七年に移動の自由が認められると、移民として急速に流出した。一八四六年には八万一千人を数えたポーゼンのユダヤ人は一九〇五年には三万人にまで減少している。その一方でベルリンにはユダヤ人が集中した。一八七一年、ベルリンには三万六千人のユダヤ人が居住し、ベルリンの総人口の三・九%を占めていた。これは帝国のユダヤ人総数の七・一%にあたる。一九〇五年になると、ベルリンのユダヤ人は十三万に増加する。彼らがベルリンの人口に占めた割合は四%にすぎないが、六十万八千人のドイツ・ユダヤ人の二一・五%

がベルリンに住んでいたことになる。<sup>27)</sup>

都市に集中したユダヤ人は主として商業と工業に携わっていた。一八六一年、プロイセンのユダヤ人就業者のうち工業と手工業に従事していたのは十六・五%にすぎず、その数はドイツの工業化に伴い増加したが、一八八二年には二〇・八%、一九〇七年においても二三・七%にとどまっている。これに対して商業と金融業に従事するプロイセン・ユダヤ人は一八六一年に五八・三%、一八八二年に五六・六%と減少傾向にあるものの、一九〇七年においてなお四七・二%のユダヤ人が商業に従事している。とりわけ銀行などの金融業にはユダヤ人が集中した。一八八二年、プロイセンの銀行従業員の約二二%、頭取、銀行経営者の約四三%がユダヤ人であり、フランクフルト、ハンブルク、ベルリンなどの金融中心地では従業員の多数をユダヤ人が占めていた。ビスマルクの助言者として知られる銀行家ゲルゾン・ブライヒレーダーもユダヤ人であった。

このようにユダヤ人は都市に集中し、主として商業・金融業を営んでいたために、一八七三年にウィーンとベルリンの証券取引所における株価大暴落を契機として大恐慌が始まると、ユダヤ人は自由主義と同一視され、大

恐慌の責任を負わされることになる。トライチユケは、「ポーランドの無尽蔵の揺籃地から野心的なズボン売りの若者の一群」が侵入し、その子孫が「ドイツの証券取引所」を支配することになると主張し、マルもユダヤ人問題を「社会・政治的問題」として提起する。マルによれば、「ユダヤ」の本質は宗教ではなく、「実利主義」であり、ユダヤ人は策略と抜け目のなさによって「十九世紀の指導的な社会＝政治的大権力」となったという。

このように反セム主義は一八七三年に始まる大恐慌を背景として成立したが、それが大衆的な広がりを見せるようになるには、「反セム主義」という概念それ自体が登場する一八七九年まで待たなければならなかった。この時間差を理解するためには政治におけるユダヤ人の役割を一瞥する必要がある。ユダヤ人の多くは国民自由党を支持していた。ドイツ・ナシヨナリズムと自由主義を結びつけた国民自由党は、「ユダヤ教を信仰するドイツ市民 [deutsche Bürger jüdischen Glaubens]」というユダヤ人の自己イメージに合致していたからである。一八六七年から一八七八年にかけて北ドイツ連邦ならびにドイツ帝国の帝国議会に選出された二十四人のユダヤ人政治家のうち半数にあたる十二人が国民自由党であり、そ

のなかには同党の創設者の一人エドゥアルト・ラスカーやドイツ銀行の創業に参加し、通過の統一と金本位制の導入を実現したルートヴィヒ・バンベルガーがいた。しかしユダヤ人と国民自由党の蜜月はビスマルクと国民自由党の間に生じた緊張によって危機を迎えることになる。一八七九年七月、経済危機を克服するためにビスマルクが自由貿易から保護貿易に転換を図ると、ラスカー、バンベルガーら国民自由党の左派は党から分離し、一八八四年には進歩党と合流してドイツ自由思想家党を結成する。このような原則的な自由主義者との対立のなかでビスマルクが「自由主義政党を破壊するために適した手段」と看做したのが、反セム主義であった。

マルがジャーナリズムの世界に留まり、彼がその結成に尽力した「反セム主義者連盟 [Antisemiten-Liga]」も「実際には力であるというよりも名目」にすぎなかったのに対して、反セム主義を掲げて政党政治の舞台に登場したのがアドルフ・シュテッカーであった。もともと彼は最初から反セム主義を唱えていたわけではない。プロテスタントの宮廷説教師で保守的なドイツ・ナシヨナリストであったシュテッカーが攻撃したのは社会民主主義のインターナシヨナリズムととりわけ無神論であった。

彼はベルリンの労働者が「無神論と結びついた社会主義の体系を通じて無神論者」となり、「しだいにキリスト教の思想から疎遠になる」ことを恐れ、「社会民主主義の無神論的組織に労働者のキリスト教連合を対置する」

必要があると考えた。その手段として彼は「キリスト教社会労働者党 [Christlich-soziale Arbeiterpartei]」の創立を決意する。その綱領は講壇社会主義と社会民主党の要求の混合であり、一方で「標準労働日」や「所得の累進課税」など社会民主党の要求を取り込みながらも、他方では「労働者の平和的な組織」が他の階級と協力することを求め、階級闘争を否定していた。<sup>45)</sup>

しかし、一八七八年一月三日、キリスト教社会労働者党を結成するためにシュテツカーがアイスケラー集会を開催すると、集会はヨハン・モストに率いられた労働者によって占拠された。彼らは「キリスト教社会党の綱領が実現したとしても事態は以前のままである」という決議をシュテツカーの面前で採択してしまう。<sup>46)</sup>キリスト教社会労働者党は一八七八年七月の帝国議会選挙に候補者を擁立したが、ここでもシュテツカーは大敗を喫する。

ベルリンでは進歩党が八万六千票、社会民主党が五万六千票を獲得したのに対して、保守党は一万二千票、キリ

スト教社会労働者党はわずか千四百票あまりであった。<sup>45)</sup>これはベルリンの労働者を「キリスト教の信仰と、国王と祖国への愛」へと導くという彼の目論見が失敗に終わったことを意味していた。

シュテツカーが攻撃したのは社会主義だけではない。彼は「現代の誤った自由主義」が「同胞を拝金主義の奴隷に墮落させた」と述べて、進歩党によって代表される自由主義をも批判している。<sup>47)</sup>しかも彼の批判は経済上の自由主義に対する批判にとどまらず、政治上の自由主義にも向けられる。彼によれば、一八四八年三月の「身の毛もよだつような変革」を賞賛し、キリスト教と聖職者を侮辱する進歩党は社会民主党と「原則的に同じ土台」に立っており、「進歩党と政治的な民主主義は社会的な民主主義の先導者にほかならない」という。<sup>48)</sup>自由主義と社会民主主義による宗教批判と民主主義の要求に反対するシュテツカーが根底において拒否していたのは、ギュンター・ブラーケルマンが指摘しているように、「神的秩序からの自立した人間の解放としての啓蒙主義」であったと言える。<sup>49)</sup>

進歩党と社会民主党には多くのユダヤ人が参加しており、シュテツカーが初めから反ユダヤ的な発言をしてい

たとしても驚くにはあたらぬ。彼は一八七八年においてすでに、ドイツの経済発展を馬に例え、「我々が望むのは別の馬であり、ユダヤ人の騎手は望まない」と述べ、同年の帝国議会選挙においても、「ユダヤ人は宗教的観点からも経済的観点からもドイツのキリスト教労働者の指導者にはなり得ない」と主張していた。彼が本格的に反セム主義の煽動を始めるのは一八七九年九月十九日の演説「現代ユダヤに対する我々の要求」からである。ここで彼はマルに倣って「社会問題」としてのユダヤ人問題を提起する。シュテツカーによれば、「現代ユダヤ」は「非宗教的権力」となっており、「銀行と商業」そして「新聞」は彼らの手中にある。従って、「世論はユダヤ人によって完全に支配され、労働は彼らによって完全に搾取されている」という。同時に彼は、「資本主義システムは労働運動も一緒に引き起こす」のだから、社会民主党もユダヤに由来すると主張する。シュテツカーは、ユダヤ人は「拝金主義的精神」と同時に「謀反」の代表者であると述べて、資本主義と社会主義の双方を「ユダヤ」の一言で一刀両断にしようとする。

このような反セム主義をもってシュテツカーが訴えかけたのは手工業者や小商人、農民などの中間身分であつ

た。彼によれば、「ユダヤ経済」のもとで最も苦しんでいるのは貧しい農民と手工業者であり、彼の要求は「ユダヤ人の下で身を屈める農民と手工業者の助けを求める叫び」に他ならないという。シュテツカーの視線はとりわけ手工業者に向けられ、「我々はツンフトを求めると述べることによって、彼はその利害を代弁しようとする。もちろん彼は単に過去への回帰を要求したのではなく、「共同の資本、機械、分業という現代の手段」を備えた新しい時代のツンフトならば、大資本と成功裏に競争できるし、「大店舗の建設」によって「熟練の親方」が「プロレタリアの立場に引き落とされる」こともなくなるというのである。こうした煽動によってシュテツカーが中間身分の下に支持者を見出すと、「キリスト教社会労働者党」もその名称から「労働者」を削除し、「キリスト教社会党」と改名することになった。

シュテツカーの反セム主義は生物学的人種主義ではなかったで、彼はユダヤ人が「キリスト教に改宗」すれば、ユダヤ人とキリスト教徒との共存は可能だと述べている。しかし反セム主義を受け入れたことによって彼の攻撃対象はユダヤ人全体に拡大し、彼は、「ユダヤ人解放は、宗教的観点においても、政治的観点ならびに社会

的観点においても、誤りである」と主張することになる。<sup>(60)</sup> シュテッカーに続いてベルリンには二つの反セム主義政党が結成された。陸軍中尉マックス・リーバーマン・フォン・ゾンネンベルクと哲学者ニーチェの義弟ベルンハルト・フェルスターの「ドイツ民族協会」[Deutscher Volksverein]、そしてエルンスト・ヘンリーツィの「社会帝国党」[Soziale Reichspartei]である。ゾンネンベルクとフェルスターは、外国からのユダヤ人移民の制限、ユダヤ人裁判官の登用の制限、小学校教師としてキリスト教徒のみを採用すること、ユダヤ人住民の統計調査を求める「反セム主義請願」運動を始め、二十二万五千人の書名を集めてビスマルクに提出した。<sup>(61)</sup> 一八八〇年十二月三十日に彼らが開催した反セム主義集會は、翌日ベルリンにおける反セム主義者の暴動を引き起こした。

### 三 反セム主義に対するドイツ社会民主党の態度

このような反セム主義者の活動に対してベルリンの労働者は、一八八一年一月十一日、「ユダヤ人問題に対する労働者の態度」をテーマとする集會で応えた。この集會では金鍍金工のフェルデインント・エーヴァルトの決

議案が採択され、「憲法によってユダヤ人に保障された国家公民としての同権の制限に抵抗」すべきことが要求された。<sup>(62)</sup> ベルリンにおける第二の集會は社会主義者鎮圧法によって禁止されたが、ブレスラウでは二千人が参加した集會でベルリンの決議が採択されている。<sup>(63)</sup> 三月十六日、ハノーファーで行われたシュテッカーの演説会には、多数の労働者が押し寄せた。会場の司会者が「シュテッカー万歳」を唱えようと労働者は「社会民主主義万歳」を三唱して応じたという。<sup>(64)</sup>

一八八一年には帝国議會選挙が予定されていた。この選挙で進歩党を打倒し、保守党を勝利させるための選挙協定として「保守中央委員会」[Conservatives Central-Comité (C.C.C.)]が結成され、キリスト教社会党とドイツ民族協會もそれに加わった。C.C.C.はベルリンの六つの選挙区のうち四つの選挙区に反セム主義者を擁立し、シュテッカーは進歩党の指導者ルドルフ・フィルヒョーと同じ選挙区に立候補した。選挙はC.C.C.の部分的な勝利に終わった。C.C.C.は四万六千票を獲得したものの、八万九千票を獲得した進歩党がベルリンの六選挙区すべてにおいて勝利した。<sup>(65)</sup> 社会民主党は三万票にとどまり、シュテッカーは「社会民主党を完全に撃破した」と豪語

したが、この選挙で明らかとなったのは、反セム主義とはいかなる妥協もしない社会民主党の断固たる態度であった。シュテツカーは、社会民主党がビスマルクの社会政策を受け入れ、キリスト教社会党と協力して「革命を克服」するならば、決選投票で保守党とキリスト教社会党は社会民主党を支持し、社会主義者鎮圧法の延長に反対するという取引を持ちかけた。しかしアウグスト・ペーベルとヴィルヘルム・リープクネヒトは「買収された三万票よりも正直に得た三千票の方が我々には望ましい」と述べて、反セム主義との取引を拒否した。<sup>66)</sup>

反セム主義に対する社会民主党の非妥協的な態度は一八八三年のベルリン市議会議員選挙においていっそう鮮明に表れる。この選挙において社会民主党はユダヤ人の会社経営者パウル・ジンガーを擁立したのである。ジンガー擁立の政治的な意図は明らかであった。当時ベルリンで活動していた社会民主党のフリッツ・ゲルキによれば、それは「我々が人種と宗教の違いに拘らないということ、我々が反セム主義者とは何の関わりもないということ」を示すためであった。<sup>68)</sup>ジンガーは九月十一日に立候補を表明し、二千人の聴衆の前で自分が立候補することの意義を強調している。「私が候補者になるというこ

とは私個人を遥かに超える意味を持っている。それは、労働者が将来においても万人の平等を保持し、何人であるかではなく、どのような人間であるかを重視するということに確信を与えるからである。<sup>69)</sup>十月十八日に行われた投票の結果、社会民主党の候補者のなかで最も多くの票を獲得したのはジンガーであり、彼は立候補した第十二選挙区で過半数を得票し、市議会議員に当選した。<sup>70)</sup>

社会民主党は反セム主義に対する断固たる闘争を繰り広げただけでなく、反セム主義の理論的解明にも努めている。その成果は一八九三年のケルン党大会において採択された「社会民主主義と反セム主義」に関する決議とペーベルの報告に結実した。ペーベルによると、手工業者や農民は資本主義的發展によって「経済的没落」を定められているが、彼らはその原因を見誤り、ユダヤ人に対する一面的な闘争を始める。これが反セム主義である。しかし反セム主義はブルジョア社会の發展に矛盾し、従って反動的であるだけでなく成功の見込みもないという。人間による人間の搾取は決してユダヤ人に固有の方法ではなく、ブルジョア社会に基づいているからである。さらにペーベルは学生の間における反セム主義に注目する。ペーベルによれば、学生の反セム主義は「知識人の

過剰生産」と「競争」に由来するものであり、学生はユダヤ人学生を「極めて厭わしく不快な競争相手」と看做しているのだという。<sup>27</sup>しかしペーベルは、反セム主義は「その反動的な性格にもかかわらず、またその意思に反して、最終的には、革命的に作用する」と主張する。反セム主義によって煽動された小市民や小農民階層も、彼らの敵は「ユダヤ人資本家だけでなく資本家階級一般である」と認識せざるを得ないからだというのである。<sup>28</sup>

このような反セム主義に対する社会民主党と労働者の闘争に鑑みると、「社会主義者はユダヤ人から市民的権利を剥奪するいかなる試みにも反対するという立場から揺らぐことはなかった」というパウル・マツシングの見解に同意することができると思われる。<sup>29</sup>事実、このような評価はその後もしも引き継がれ、リユールツプも「社会主義者によって組織された労働者は反セム主義に対してほとんど完全に免疫を持っていた」と述べているし、<sup>30</sup>ジルバーナーのテーゼを継承しようとするウイストリッチでさえ、「労働者階級はドイツにおける他のいかなる階級よりもキリスト教的反セム主義の訴えに対して抵抗力を示した」と認めているほどである。<sup>31</sup>また理論的な観点においても、ペーベルの報告に見られる「近代反セム主義

とその信奉者に関する分析は今日でもなお有効」である<sup>32</sup>と評価されている。もちろんユダヤ人問題に対する社会民主党と労働者の態度に問題がなかったわけではない。ペーベルはユダヤ人の「鼻」に関して冗談をとばし、<sup>33</sup>リーブクネヒトは「フランスのドレフュス大尉の無罪を信じていない」と述べたことさえある。<sup>34</sup>しかしこれらの個別的発言を度外視するとしても、ユダヤ人問題に対する社会民主党と労働者の態度には、マルクス主義の根幹にかかわる理論的な問題も隠れていたことが見逃されはならない。

そのような問題の一つは、すでに一八八一年一月十一日の決議「ユダヤ人問題に対する労働者の態度」に含まれている。上述したように、この決議においてはユダヤ人の市民的同権の擁護が要求されたが、そこでは同時に、ユダヤ人に対する反セム主義の攻撃は「所有階級内部の物質的利害闘争と権力闘争」と看做されているのである。<sup>35</sup>確かに、一八八一年当時、このような把握は一定の説得力を持っていた。ヘンリーツイとともに反セム主義的煽動を行っていたユリウス・ルツベルは、自ら発行する新聞の印刷所において十分な賃金を支払っていないことが暴露され、「これではユダヤ人に友好的な新聞の方が十

倍もましだ」と言われていたからである<sup>(81)</sup>。しかし、このような反セム主義の階級的把握が市民的同権の擁護という民主主義的要求と矛盾することは明らかであろう。ユダヤ人資本家がユダヤ人として攻撃されるならば、それは市民的同権という原則に抵触するからである。

反セム主義の階級的把握を一步進めたのが、フランツ・メーリングによって広められた「反セム主義」と「親セム主義」の対置であろう。メーリングによれば、「反セム主義が行動よりも言葉によってユダヤ人に対して犯した残虐さ」があるからと言って、「親セム主義」も行動によって犯している残虐さを忘れてはならない<sup>(82)</sup>という。ここではユダヤ人が資本主義と同一視され、ユダヤ人の同権という要求は後退している。しかし、このような立場を積極的に採用したのはユダヤ人社会主義者たちであった。彼らは反セム主義者が社会民主党をユダヤ人の党として攻撃しないようにするために、反セム主義だけでなく親セム主義も批判することによって、ユダヤ人問題において中立を保とうとしたのである。この中立政策はジンガーとオーストリア社会民主党のユダヤ人指導者ヴィクトル・アードラーにおいて顕著に現れる。

一八九一年のインターナショナル・ブリュッセル大会においてアメリカのユダヤ人労働者の指導者エイブラム・カーハンが「ユダヤ人問題に対する万国の労働者組織の態度」を議題にのせると、ジンガーとアードラーはユダヤ人問題の討論を妨げようとした。アードラーがカーハンを夕食に招くと、そこには偶然を装ってジンガーも現れ、彼らは次のようにカーハンを説得したという。反セム主義者は社会主義がユダヤ人の金で支えられていると主張している。マルクスとラサルルだけでなく、ジンガーやアードラーもユダヤ人だからである。もしインターナショナルがあなたの決議案を採択するならば、反セム主義者は自分たちの主張が確認されたと叫ぶであろう<sup>(83)</sup>。大会は、「反セム主義と親セム主義の煽動を非難」するという中立政策を採用し、カーハンが要求したユダヤ人問題の討論を放棄してしまつた。

もう一つの理論上の問題点は、反セム主義は「患者の社会主義」であるという理解に由来する。このような理解はすでに一八八一年の『ゾツィアルデモクラート』の論説にも見られる。それによると、反セム主義は「高次の社会的不満を証明」しており、それは「今は確かに誤つた道に導かれている」とはいえ、「最終的には我々

の利益」となる。反セム主義の信奉者も「社会主義社会による資本主義社会の廃止という唯一の救済しかない」という認識に到達するからだという。<sup>(86)</sup>このような反セム主義の「革命的作用」に関する理解はケルン党大会の決議において定式化され、社会民主党の理論家によつてしばしば繰り返されることになる。リープクネヒトによれば、「反セム主義者諸君が耕し、種を蒔き、我々社会民主主義者が収穫するのである。だから、彼らの成功は我々にとつて決して迷惑なことではない。<sup>(87)</sup>」それ故、

メーリングが述べているように、「社会主義の観点からすれば、反セム主義の相対的な成長は歴史・経済的發展における進歩である」と評価されるのである。<sup>(88)</sup>しかし、このような立場はユダヤ人全体に対する反セム主義の攻撃をユダヤ資本に対する攻撃と看做すことによつて、ユダヤ人労働者を犠牲にすることになる。だからこそエンゲルスは一八九〇年に発表された書簡「反セム主義について」において、ユダヤ人労働者の存在を指摘すると同時に、反セム主義は「反動的な目的」にしか役立たないと述べたのである。そうだとすれば、エンゲルスがケルン党大会の決議案を承認していたとしても、<sup>(90)</sup>ケルン党大会の立場はエンゲルスの書簡よりも理論的に後退してい

るとさえ言えるのではないだろうか。

ユダヤ人問題をめぐるベルンシュタインの考察にはこのような歴史的背景があつた。七〇年代から社会主義運動に参加していたベルンシュタインにとつて、反セム主義は青年期に直面した政治問題の一つであり、ユダヤ人問題に関する社会民主党の見解の多くを彼も共有していただけでなく、その形成に関与さえしている。しかしユダヤ人問題に対する社会民主党の態度を検討することによつて、彼はしだいに独自の立場を形成することになる。

#### 四 ベルンシュタインとユダヤ人問題

エドゥアルト・ベルンシュタインは一八五〇年ベルリンに生まれた。ダンツイヒ出身の父ヤーコプはブリキ職人として遍歴した後、一八三八年からベルリンに居住している。ベルンシュタイン家は周囲に同化して生活し、エドゥアルトの両親はすでにイディッシュ語を放棄していた。ベルンシュタインによると、彼らは「きれいなドイツ語」を話しており、彼らの言葉にユダヤ的な表現が混入することがあるとしても、それはベルリンの非ユダヤ人の下でもすでに定着した表現に限られていた。<sup>(91)</sup>また両親は「ユダヤをドイツから民族的に区別されたものと

理解」することはせず、ヤーコプは自分をドイツ愛国者であると感じていたという。<sup>(92)</sup>

このような同化はヤーコプの職業と家族の宗教によって促されていた。ヤーコプは一八四三年以来、鉄道会社に勤務し、機関車の運転士として働いていた。運転士という職業は一般の鉄道労働者よりは高い地位にあると考えられてはいたものの、「根本的に異なる社会階級の構成員」とは看做されていなかったという。また一家が帰属していたユダヤ教改革派は「自由主義的ユダヤ人の集まり」<sup>(94)</sup>であり、彼らは日曜日を休日とし、食事の戒律も遵守していなかった。<sup>(95)</sup> そのうえベルンシュタイン家はクリスマスさえ祝っていた。<sup>(96)</sup> しかし一家がユダヤ教の信仰を否定していたというわけではない。ベルンシュタインは、両親と兄弟姉妹、そしてエドゥアルト自身も、教条から自由で儀式ばらないユダヤ教改革派の信仰をキリスト教よりも好んだと述べている。<sup>(97)</sup> もっともエドゥアルトは、ピーター・ゲイが指摘しているように、「半ば信者、半ば懐疑論者として」成長したように見える。<sup>(98)</sup> エドゥアルトは死の床に臥した従姉のためにこう祈っているからである。「神様、もしあなたが存在するならば、私の従姉を助けてください」と。<sup>(99)</sup> ベルンシュタインは、一八七

八年、シュテツカールの煽動に対抗してモストが労働者に対して教会からの離脱を訴えたとき、ユダヤ人として同じことをする義務があると感じ、ユダヤ教から離脱してしまう。<sup>(10)</sup>

このようにベルンシュタインはドイツ人としての意識とユダヤ教改革派の信仰を持つ両親の下で育った。彼が述べているように、ユダヤ教改革派が「自由主義的ユダヤ人の集まり」であったとすれば、彼は確かに「自由主義的ユダヤ人の遺産」を継承していると見えよう。しかしそれはベルンシュタインをシオニズムへと導くものではなかった。その影響はむしろ彼がユダヤ人問題の解決策を同化に求めたという点に表れる。彼によれば、「ユダヤ人の社会的分離がすべてなくなった所ですか、ユダヤ人問題の解決については語りえない」<sup>(101)</sup> のであり、「非ユダヤ人に対する特殊ユダヤ的団結」<sup>(102)</sup> に対しては「どれほど精力的に闘っても十分ということはない」という。<sup>(103)</sup> それ故、彼はユダヤ人の民族自治という要求に対して批判的な態度を取った。ベルンシュタインによれば、「政治的性格を持つユダヤ人の特殊な代表機関」は、後進的な国家では一定の意義を持ち得るとはいえ、先進諸国においてそれは「余計であり反動的」であった。<sup>(104)</sup> 彼はシオ

ニストになることもなかった。一九一七年の著作『世界大戦におけるユダヤ人の諸任務』において彼は次のように述べている。「私はシオニストではない。そうであるためには私はあまりにも自分をドイツ人と感じている」と<sup>(四)</sup>。ジェイコブズは、「ベルンシュタインと自由主義的ユダヤ人の遺産を共有」していたドイツ・ユダヤ人がシオニズムに敵対していたと指摘し、ベルンシュタインが「自由主義的ユダヤ人の遺産」を介して労働者シオニズムに共感するようになったということは「まったくありそうもない」と述べて、ウイストリッチを厳しく批判しているが、ベルンシュタインの発言はジェイコブズの解釈を裏付けていると言えよう。

一八七二年以来、ベルンシュタインは社会主義運動に参加していたが、ここで彼はユダヤ人問題に直面することになる。この当時、ドイツ労働運動はラサールによって創設された「ドイツ労働者総同盟」[ADAV]とアイゼナハで結成された「社会民主主義労働者党」[SDAP]が激しく争っていた。六〇年代末にユダヤ系知識人が ADAV を離れ、SDAP の結成に参加すると、ADAV の活動家の間では、ユダヤ系知識人がドイツ労働運動の統一を破壊するのではないかという恐れが広ま

り、彼らは SDAP を反ユダヤ的言辞で攻撃するようになった<sup>(五)</sup>。ベルンシュタインの回想によると、一八七三年、ベルリン北部の小都市ベルナウで開かれた集会ではマックス・カイザーとベルンシュタインが演説することになった<sup>(六)</sup>。そこに ADAV のヴィルヘルム・ハッセルマンも現れた。ハッセルマンは農民、紡績工、職工などがユダヤ人の仲買人によって搾取されていると述べて、反ユダヤ的な雰囲気を作り出し、SDAP を「ユダヤ人の黒幕の手になる紛い物」と描いた<sup>(七)</sup>。

ADAV の反セム主義的な傾向は一時的な現象として終わった。その後 ADAV の活動家たちは反セム主義に対して強い抵抗力を示している。例えば、ADAV の指導者カール・ヴィルヘルム・テルケは一八七三年にベルンシュタインを「ユダヤ小僧」[Jüddchen]と呼んで侮辱したが、一八八一年には反セム主義を保守派の策動と看做し、「反セム主義者の反ユダヤ暴動は選挙競争の前哨戦にほかならない」と述べている<sup>(八)</sup>。これに対して SDAP は反セム主義、とりわけオイゲン・デューリングのそれをある程度まで容認していた。ベルンシュタインは、デューリングの講義における「ユダヤ人憎悪」の「醜悪さ」にもかかわらず、彼が社会主義に大きく寄与

したと考<sup>(10)</sup>え、その著書をベーベルやモストに勧めていたのである。ベルンシュタインによれば、これは、七〇年代頭<sup>(11)</sup>の会社社立時代にユダヤ人の証券資本が果たした役割のために、彼自身「反ユダヤ的な気持ち」になり、七〇年代後半に現れた反セム主義の最初の徴候でさえ、「ユダヤ人の不相応な出しやばりに対する反応として理解できた」からだとい<sup>(12)</sup>う。

とはいえ大衆的なユダヤ人迫害運動へと転化した反セム主義をベルンシュタインは決して軽視していない。それはベルリンの反セム主義に関して一八八一年に交わされたエンゲルスとの往復書簡から読み取れる。エンゲルスは反セム主義を一過性の運動と看做していた。エンゲルスによれば、反セム主義とは「保守派の当選を実現するための選挙策動」に他ならず、選挙が終われば消滅するとい<sup>(13)</sup>う。シュテッカーの活動を思い起こすならば、エンゲルスはベルリンの状況を的確に把握していたと言<sup>(14)</sup>えよう。しかしベルンシュタインは「反セム主義を政治的、宗教的にしか扱わないとすれば、大きな誤りとなる」と主張した。彼は反セム主義の根底に「農民、手工業者、役人、教師等」の社会的不満とい<sup>(15)</sup>う現実的基礎が存すると考<sup>(16)</sup>えたのである。

しかしベルンシュタインはこのような社会的不満に反セム主義の現実的基礎を求めることによって、反セム主義に一定の積極的な意義を認めることになる。小ブルジョアと農民が反セム主義に共感を寄せるのは「善意」からだ<sup>(17)</sup>とすれば、なおさらである。こうして彼は、選挙後に反セム主義が崩壊するとしても、社会民主党が「その遺産を相続しなくてはならない」と主張することに<sup>(18)</sup>なる。ベルンシュタインは反セム主義を「愚者の社会主義」と看做し、後にケルン党大会で定式化される立場に立っていた<sup>(19)</sup>と言<sup>(20)</sup>える。彼があえて反セム主義の用語を用いて執筆した論評「ドイツ帝国のユダヤ化」はこのような立場から理解されるべきであろう。ここで彼は「悪徳商法がドイツ帝国の根本原理となっている」と述べたうえで、「割礼を受けたユダヤ人」だけを攻撃し、「割礼を受けていないユダヤ人」を崇拜している反セム主義を嘲笑<sup>(21)</sup>している。

ベルンシュタインは反セム主義をその背景にある小ブルジョア的階級利害や社会民主党にとつての利用価値という観点から評価していた<sup>(22)</sup>だけではない。後に回想しているように、彼は「ユダヤ人問題を民主主義的平等の問題として」扱おうと努めていた。彼は次のように述べて

いる。「自由主義的かつ進歩的なユダヤ人」が社会主義者鎮圧法に抗議しないのに対して、労働者は社会主義者鎮圧法と反セム主義がどちらも「ホーエンツォレルン王国において以前から培われてきた残酷性、卑劣さ、良心の欠如」に由来することを認識し、ユダヤ人のためにも「人權」を要求しているのだと。

このような観点を保持していたからこそ、ベルンシュタインは反セム主義に一定の積極的な意義を認めつつも、労働者が反セム主義に陥らないように配慮を怠らなかつた。彼は『ゾツィアルデモクラート』紙上でマルクスの論文「ユダヤ人問題によせて」を紹介した際、読者に注意を促している。ユダヤ人に関するマルクスの論述を文脈から切り離すと、マルクスを誤解することになる。マルクスがここで主張しているのは、「いわゆるユダヤ精神」は資本主義社会の産物であり、資本主義社会は「東洋のユダヤ人」がいないところでは「キリスト教徒のユダヤ人」を生み出すということなのだ。この時期において反セム主義に対するこのような注意喚起は不可欠であった。シュラミット・ヴォルコフが指摘しているように、一八八〇年頃まで社会主義と反セム主義はどちらも手工業者から支持者を集めていたからである。事実、ベ

ルンシュタインはエンゲルスへの書簡において、もし労働者が「民主主義的感情」や「宗教に対する憎しみ」を持つていなければ、シュテツカーの側に寝返る者は実際よりも遙かに多かつただろうと述べている。

それだけではない。ベルンシュタインは社会民主党には反ユダヤ的な潮流も存在すると指摘している。シュトゥットガルトで党の娯楽紙『ノイエ・ヴェルト』を編集していたブルーノ・ガイザーなどの「美的ないしアカデミックな社会主義者」は、ベルンシュタインによれば、もはやプロレタリア革命の可能性を信じておらず、権力から譲歩を引き出そうとする「漸進的發展というユートピア論者」であつただけでなく、彼らは「反セム主義者」であつた。ベルンシュタインはエンゲルスに次のように書いている。「総じて我が党の知識人の多数と同様に、シュトゥットガルトの諸氏も同時に反セム主義者です。」

実際にはガイザーも反セム主義を批判しており、彼を反セム主義者と看做すことはできない。とはいえ社会民主党の内部に反ユダヤ的な潮流が存在したことは、ベルンシュタインがユダヤ人問題の理解を深める契機となつた。それは一八八四年の帝国議会選挙におけるジンガー

の態度の分析に表れる。ベルリン四区から立候補していたジンガーは、十月二十八日の投票で当選を決めていたが、ベルリン二区では自由主義者のフィルヒョーと反セム主義者シュテツカークの決選投票となった。二十八日の投票でフィルヒョーはシュテツカークを四千票あまり上回っていたにすぎず、十一月十三日に予定された選挙でキャステイング・ポートを握ったのは社会民主党に九千票を投じた労働者であった。フィルヒョー支持のためにジンガーが二区に入ると、シュテツカークはユダヤ人資本家ジンガーと労働者の間に対立を作り出すために次のように述べたという。「この男がわざわざ二区にやって来て、不和と対立の種を蒔いたところを見ると、ベルリンではまだユダヤ人たちが指導権を握っているようだ。」これに対してジンガーは労働者に向けて訴えている。「シュテツカーク反対！これが十一月十三日の諸君のスローガンでなくてはならない」と。社会民主党支持者の票はフィルヒョーに流れ、シュテツカークは敗北した。決選投票になった場合のこのような行動は事前に決定されたものであり、リープクネヒトは、「保守派との協力はいかなる場合においても許されない」が、「急進的ブルジョア分子との協力が党の利益となる場合が生じ得る」

エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題

と述べていた。しかしジンガーはこのような戦術に反対し、自由主義者と保守派の間における中立と決選投票における棄権を主張していたのである。

ベルンシュタインはエンゲルス宛の書簡においてジンガーのこのような態度を心理学的に分析している。ベルンシュタインによれば、ジンガーの態度の背景にあるのは「彼の感情との葛藤」であった。確かにジンガーは帝国議会選挙の決選投票において自由主義者を支持したとはいえ、社会民主党の内部には「我々の『知識人』の反セム主義」が存在し、ジンガーは「過剰な誠実さ」のために「自ら反セム主義者と国家社会主義者の役割を演じなくてはならないと思っている」というのである。このように社会民主主義者としての義務とユダヤ人社会主義者としての感情の葛藤を指摘したとき、ベルンシュタインは人間存在の重層構造を認識していたと言えよう。

ユダヤ人社会民主主義者における「過剰な誠実さ」の分析に基づき、ベルンシュタインは一八九三年の論文「決まり文句と反セム主義」において「親セム主義」という概念の批判に向かう。もちろんベルンシュタインは、アードラーやジンガーのように「彼ら自身ユダヤ系であるために、ユダヤ人の利益を優遇している」という嫌疑か

二七七 (二七七)

ら党を解放することを彼らの特殊な義務」と考えて、「親セム主義」に反対するユダヤ人社会民主主義者の努力を「尊重する」という。とはいえ「親セム主義」という概念はあまりに多義的である。ベルンシュタインによれば、それが「資本主義的金融ユダヤ人への追従」等意味する限り、「それ自体として異議を差し挟むことはできないであろう」という。しかしこの言葉は反セム主義者によっても利用されており、彼らは「ユダヤ人の無条件的な排撃、ユダヤ人の権利剥奪という彼らの要求に賛同しない者」を「親セム主義」として攻撃している。そこでベルンシュタインは、たとえ反セム主義者とは異なる意味においてであるとしても、社会民主主義者が「親セム主義」という言葉を使用するならば、彼らはこの言葉に「一定の正当性」を与えてしまうのではないかと問いかけたのである。

「親セム主義」概念に関するベルンシュタインの問題提起に対してメーリングは次のように応じている。確かに、「親セム主義」という多義的な言葉が誤解される可能性は考慮しなくてはならないとしても、「大資本の腐敗」がその身を隠している「イデオロギー的な外皮」は「親セム主義」と呼ばざるを得ないのであり、このよう

な「親セム主義」を容赦なく暴露することこそ社会主義的新聞の任務なのだ。このようにメーリングが「親セム主義」批判に固執したために、政治的效果という観点からすれば、ベルンシュタインの問題提起は不発に終わったと言えよう。しかも表面的には、この時期のベルンシュタインはケルン党大会におけるベーベルの報告と同じ理論水準にあるように見える。彼は、ベーベルと同様に、反セム主義を「愚者の社会主義」と看做しているだけではない。⑩ 同時期に書かれた書評においてベルンシュタインは反セム主義の原因を「市民社会における潜在的な競争」に求め、「大学」、「官吏」、「士官」など「資格を必要とする職業の構成員」はユダヤ人に「不快な競争相手」を見ていると指摘したが、この点においても彼はベーベルと問題意識を共有している。

しかしこの時期のベルンシュタインは反セム主義に対する態度を変更しつつあったように思われる。彼はカウツキー宛の書簡において論文「決まり文句と反セム主義」の意図を説明し、次のように述べている。「今日の反セム主義にとってユダヤ資本は、可能な限りすべての職業からユダヤ人の競争手を排除するための単なる口実、デマゴギー的手段にすぎない。」それ故、「反セム主

義とユダヤ資本を対置することの誤りを証明するには「適合い」だ。ベルンシュタインはさしあたり「親セム主義」という言葉の使用を批判しているにすぎないが、彼の認識はそれ以上の射程距離を持っていた。反セム主義がもはやユダヤ資本に対する攻撃でないとなれば、反セム主義を「愚者の社会主義」として大目に見ることはできなくなり、むしろ社会民主党の利害を度外視して、反セム主義の攻撃からユダヤ人を保護することが必要になるからである。このような立場をベルンシュタインが明確化するのには、一八九八年、まさに修正主義を完成させる時期のことである。

それは自殺したマルクスの娘エレノア・マルクスへの追悼文に現れる。父のカール・マルクスはユダヤ系であったとはいえ幼少期にキリスト教へと改宗しており、母はキリスト教徒であったから、エレノアはユダヤ人ではなかった。しかしベルンシュタインによると、彼女は「ユダヤ人への強い共感」を持っており、「ユダヤ人がユダヤ人として抑圧されているところでは、彼女は魂に深く刻まれたプロレタリア的階級感情に惑わされることなく、階級的立場に関わりなく、抑圧された者の側に立つた」という。ここでは、労働者階級と社会民主党の利害

から切り離してユダヤ人問題を解決しなくてはならないという立場が鮮明にされている。ベルンシュタインはこの立場をエレノア・マルクスのそれとして描いているとはいえ、それは彼自身の立場でもあったと言えよう。事実、ベルンシュタインはベルフォート・バックストンの論争において次のように述べているのである。「今日の状況下では、いかなる反セム主義に対しても『親セム主義者』であることが私には定言命法である」<sup>(18)</sup>。この「親セム主義」が「資本主義的金融ユダヤ人への追従」等ではないことは言うまでもない。それが意味するのは「ユダヤ人の悪名高い誤謬の非難と彼らの僭越さの拒否を排除しない、ユダヤ人への一定の共感」であろう。

九〇年代末にベルンシュタインがこのように立場を変更したことは、どのように解釈されるべきであろうか。彼の発言を同時代的背景から説明することは困難ではない。「今日の状況下」とベルンシュタインが書いたときに、彼が念頭に置いていたのはオーストリアにおけるキリスト教社会党の勝利やフランスにおけるドレフュス事件であると思われる。このような同時代的背景に鑑みれば、確かにハイトが主張しているように、反セム主義が凶暴性を増すにつれてベルンシュタインは「自らのユダ

ヤの根源へと回帰した」と解釈することも可能であろう。しかしその場合、ユダヤ人問題に対するベルンシュタインの立場の変更と修正主義の成立の關係は曖昧なままになつてしまふ。そこでこの關係を明らかにするために、民族問題に対する彼の態度を検討し、ユダヤ人問題と民族問題におけるベルンシュタインの姿勢の共通点を探らなくてはならない。

## 五 ベルンシュタインと民族問題

若きベルンシュタインは東ヨーロッパの諸民族の解放運動に深い関心を寄せていた。彼はその回想録において、「セルビアとブルガリアの民族解放闘争に対して私は當時のドイツの同志たちよりも遥かに深い共感を持つていた」と述べている。<sup>(13)</sup>しかし民族問題に対するこのような態度はエンゲルスの批判を招かざるを得ない。一八八二年二月のエンゲルスへの書簡においてベルンシュタインがヘルツェゴヴィナ蜂起に関連して、「この貧しい自然民族に対する我々の共感を表明すべき」であると主張すると、エンゲルスは民族問題におけるマルクス主義の原則的な立場を強調する。「我々は西ヨーロッパのプロレタリアートの解放のために活動しているのであって、こ

の目標のために他のすべてを従属させなくてはなりません。」<sup>(14)</sup>それ故、「彼らの解放がプロレタリアートの利害と衝突するならば、私には彼らがどうなつてもかまわないのです」<sup>(15)</sup>と。ベルンシュタインは、自分の立場が最初からエンゲルスのそれと根本的に異なつていたわけではないと述べて、この批判を受け入れる。<sup>(16)</sup>

一八九五年にエンゲルスが死去すると、カウツキー、ベルンシュタイン、ルクセンブルクら次世代のマルクス主義者たちは、東ヨーロッパの民族問題に対するマルクスとエンゲルスの態度を再検討し、それを大胆に修正し始める。このような民族問題に関する討論のなかでベルンシュタインの独自性を最も明確に示したのは、ルクセンブルクによつて主導されたポーランド問題討論であつた。

ポーランド問題討論は「ポーランド社会党 [PPS]」が一八九六年に開催されるインターナショナル・ロンドン大会に提出すべく準備していた民族問題に関する決議案を契機として始まつた。ポーランド独立を労働者の要求として掲げた PPS の決議案に対して「ポーランド王国社会民主党 [SDKPiP]」のルクセンブルクはただちに反応する。彼女は『ノイエ・ツァイト』誌上に論文「ド

イツとオーストリアにおけるポーランド社会主義運動の「新潮流」を発表し、ポーランド再建という要求を批判した。ルクセンブルクによれば、工業が最も発展しているのはロシア・ポーランドだが、ポーランド工業はロシア市場に依存しており、ポーランド経済とロシア経済は有機的に結合している。それ故、「ポーランド再建はその社会的発展の帰結であるどころか、むしろそれに直接的に矛盾している。」<sup>(14)</sup>従つてポーランド再建という要求にはその担い手が存在せず、小ブルジョアと知識人は民族的な志向を示すとはいへ、彼らに民族解放を遂行する力はない、という。<sup>(15)</sup>

カウツキーはポーランド問題論争の総括として論文「ポーランドの終焉？」を発表し、ルクセンブルクに厳しい批判を加える。彼はルクセンブルクがナシヨナリズムの担い手としての小ブルジョアを過小評価していると指摘する。カウツキーによれば、資本主義における小ブルジョアの没落とは彼らの数の減少ではなく、彼らの「幸福の減少、安定した存在の減少」に表れるのであるから、「実践的な政治家が小ブルジョアを無視し得る数として扱うのは誤りである」という。<sup>(16)</sup>さらにカウツキーはルクセンブルクが軽視した言語問題を取り上げる。カ

ウツキーによれば、社会的生産は言語なしには不可能であり、密接な社会的共同生活は必然的に言語共同体を生み出す。しかしポーランドにおいてゲルマン化とロシア化は失敗しており、ルクセンブルクが主張するポーランド経済とロシア経済の有機的結合なるものが実は表面的な結合にすぎないのではないか、というのである。<sup>(17)</sup>

ポーランド討論の総括は本来ベルンシュタインが執筆することになっていた。カウツキーは大著『農業問題』の執筆中であり、ポーランド論に時間を割けなかったのである。そこでカウツキーはベルンシュタイン宛の書簡において、ルクセンブルク批判の骨子を説明し、ポーランド論文の執筆を依頼した。<sup>(18)</sup>ベルンシュタインは、「君「カウツキー」とルクセンブルクの論文の中間にあるような立場を展開してもいいなら」という条件で、ポーランド討論の総括の執筆を承諾する。<sup>(19)</sup>

ベルンシュタインのポーランド論文は結局発表されなかったが、彼は論文「ドイツ社会民主主義とトルコの混乱」において自らの立場を明らかにしている。彼はルクセンブルクがポーランド問題において民族解放を社会主義の勝利という「最後の審判」にまで先延ばしにしたことを批判し、民族自決権の承認を要求するのである。

「いかなる人民、いかなる民族も、普遍的解放の日までなだめすかされるわけにはいかなないのであって、彼らは自らの自由をそれ以前に獲得するために有利な機会をすべて利用するものである。これは彼らの正当な権利であり、それが我々のその都度の利害と衝突したり、より高次の利害のために彼らに反対するように諸関係によって強いられる場合でさえ、我々はこの権利に意義を唱えないであらう。」<sup>(16)</sup>

民族問題におけるベルンシュタインの独自の立場はこの一節に集約されている。ルクセンブルクとカウツキーが主として経済学的な観点からポーランドの再建は可能かどうか論じていたのに対して、ベルンシュタインは独立の権利へと論点を移している。またベルンシュタインは諸民族の「正当な権利」が社会民主党の利害や「より高次の利害」と衝突するとしても、その権利は承認されなくてはならないと主張している。ハンス・モムゼンが指摘しているように、ここで彼が念頭に置いているのは、バルカンのスラヴ人の解放を「西ヨーロッパのプロレタリアートの解放」に従属させた「十年前のエンゲルスの立場」であろう。<sup>(17)</sup>ベルンシュタインは民族自決権を承認することによってエンゲルスの「歴史なき民」論を克服

したのである。

民族問題におけるこのような立場と同時期に彼がユダヤ人問題に対して取った態度の共通点は明らかである。ちょうど被抑圧民族が「普遍的解放」を待たずに自ら自由を獲得する権利を持ち、その権利が「より高次の利害」や社会民主主義の利害と衝突するとしても、社会民主主義者はそれを承認しなくてはならないのと同じように、社会民主主義者は「ユダヤ人の党と看做されない」ことが党の利益になるとしても、エレノア・マルクスがそうしたように、ユダヤ人がユダヤ人として抑圧されているところでは、抑圧されている者の側に立たなくてはならないとベルンシュタインは考えていたのである。

これが修正主義に由来すると指摘することは容易である。ユダヤ人問題に対するベルンシュタインの態度を「自由主義的ユダヤ人の遺産」から説明しようとするウイストリッチでさえ、ベルンシュタインは社会主義の最終目標に無関心になるにつれて、「もはやユダヤ人問題の解決を不確かな未来へと、無階級社会というユートピア的可能性へと延期することはできない」と考えるようになったと述べているほどである。<sup>(18)</sup>しかし、このように指摘するだけでは不十分であろう。そもそも、民族的

解放などの特殊な解放を労働者の解放による普遍的な解放に従属させるマルクス主義の革命論の根底には、人間の本質は労働であり、従って労働者の解放には「普遍的に人間的な解放」が含まれているというマルクスの人間観があった。その他のすべての隷属関係は労働者の隷属の「変形と帰結」にすぎないとされたからこそ、民族的解放は労働者の解放に従属させられたのである。<sup>(14)</sup>このようにマルクスの革命論が労働を人間の本質とする彼の人間観に由来するのだとすれば、特殊な解放を普遍的な解放から切り離すためには、ベルンシュタインはマルクスの人間観を批判する必要があるはずである。

かくしてベルンシュタインはマルクスの「プロレタリアート」概念に批判の矛先を向ける。マルクスは論文「ヘーゲル法哲学批判序説」において、「部分的な革命はユートピアであり、プロレタリア革命だけが可能である」と主張したが、ベルンシュタインによると、革命を担うべき「近代プロレタリアートは、とりわけその歴史的可能性という観点において完全に理想化」されているという。<sup>(15)</sup>とりわけベルンシュタインが問題視したのは、マルクスの「プロレタリアート」が階級的属性しか持たない「理論上の労働者」にすぎないということであった。

これにベルンシュタインは「階級的属性のほかには民族性という属性」も備えた「現実の労働者」を対置する。<sup>(16)</sup>彼は、政治闘争やストライキのスローガンに対してフランス、イギリス、ドイツの労働者は異なる仕方では反応するが、それは「民族的特殊性の影響」であると述べて、民族性の存在を指摘しただけではない。彼は同時代の社会民主主義者よりも民族性の意義を肯定的に評価していた。民族を言語共同体と看做したカウツキーによれば、商人の共通語から成立した民族言語は、資本主義が世界的に発展するにつれて「世界語」に席を譲るといふ。<sup>(17)</sup>これに対してベルンシュタインは、すべての人間が一つの言語を話すようになれば、「精神的な喜びへの刺激と源泉」が失われてしまうと指摘している。<sup>(18)</sup>カウツキーにとつて民族と言語が資本主義的發展の付随現象にすぎなかったのに対して、ベルンシュタインは言語的多様性を人間の精神的な豊かさの源泉と看做していたと言えよう。民族性と同様にユダヤ人であることもまた現実の労働者の属性の一つである。前述したように、ベルンシュタインはジンガーの葛藤から、一個人が社会民主主義者であると同時にユダヤ人でもあるという人間存在の重層構造を洞察していた。そうであればこそ、彼はロシアのユダヤ人

プロレタリアが「ユダヤ人として、またプロレタリアとして、二重に権利を剥奪され、搾取されている」と述べたのである。<sup>(16)</sup>このようにベルンシュタインは現実の労働者を専ら階級的属性から一面的に把握するのではなく、民族性や「ユダヤ人」という属性も備えた重層的な存在として理解することによって、特殊な解放としての民族的解放やユダヤ人問題の解決を労働者の解放という普遍的解放から切り離し、いわば「部分的な革命」を構想することができたのである。

このような特殊な解放を実現するのは、ベルンシュタインによれば、民主主義であった。マルクスにおいて民主主義があくまでも階級闘争の手段として理解されているにすぎないのに対して、ベルンシュタインは、「財産、出自、信仰に基づく例外を生み出し、承認する法律の不在<sup>(17)</sup>」と民主主義を定義し、このような民主主義は「手段であると同時に目的でもある」と主張する。民主主義が目的でもあるのは、それが「社会進歩の強力な梃子<sup>(18)</sup>」だからである。それ故、ベルンシュタインは社会民主党が民主主義の立場に立つだけでなく、「党の戦術に対して民主主義から生じる帰結のすべて」を引き受けなくてはならないと要求する。<sup>(19)</sup>この「民主主義から生じる帰結の

すべて」には社会民主党にとって不利な帰結も含まれていると理解すべきであろう。このような民主主義理解に基づき、ベルンシュタインは社会民主党の利害にかわりなく民族自決権を承認し、ユダヤ人の市民的同権を擁護したのである。

## 六 おわりに

ユダヤ人問題におけるベルンシュタインの独自の態度が修正主義に基づいていたことはもはや明らかであろう。彼は、階級的属性しか持たないマルクスの労働者概念を批判し、民族性や「ユダヤ人」などの特殊な属性も備えた人間存在の重層構造を理解することによって、民族的解放やユダヤ人の市民的同権の擁護を労働者の解放から切り離したのである。これに対して「自由主義的ユダヤ人の遺産」はベルンシュタインにおいてむしろ同化主義として表れていた。

晩年のベルンシュタインはユダヤ人の政治的自立を積極的に支持するようになる。しかし、それは修正主義だけで説明されることではない。というのも、確かに彼は修正主義に基づいて民族自決権を承認したとはいえ、それは特定の民族の独立を要求するものではないからであ

る。もちろん彼はシオニズムを無条件に支持したわけではない。彼は自分がシオニストではないと繰り返し表明しただけでなく、暴力的なシオニズムを「疫病のように拡大する醜態」と呼び、ユダヤ人の故郷が「国粹主義的『volksch』」な国家とならないよう警告していた。また社会主義者としても「私は今日でもなお徹頭徹尾インターナショナルリズムの立場に立っている」と述べ、労働者シオニズムに対して「インターナショナルへの帰属」を忘れないように訴えている。

それではベルンシュタインがシオニズムを肯定的に評価するようになったのは何故なのか。その手がかりは最晩年のインタヴューにあるように思われる。そこで彼は「苦しめられ抑圧された宗教を去る者は臆病である」と述べているが、この発言から容易に察せられるように、彼がシオニズムを支持したのは、オットー・バウアーがあえてユダヤ教から離脱しなかったのと同様に、反セム主義に抗議するためであった。すでにユダヤ教から離脱していたベルンシュタインはシオニズムを支持することによって反セム主義に抗議しようとしたのである。ベルンシュタインがシオニストになることなく、ドイツ・ユダヤ人として、反セム主義に対する抗議からシオニズム

を支持したのだとすれば、「ユダヤ的根源への回帰」というハイトの解釈はベルンシュタインの立場を歪めるものと言えよう。それどころか、民族への帰属を唯一の評価基準とする歴史解釈は、階級闘争を唯一の尺度とする教条的なマルクス主義歴史学と同様に、一面的な歴史解釈という批判を免れないであろう。

#### 註

- (1) Karl Marx, Zur Judenfrage, in: Karl Marx, Friedrich Engels, *Werke* I 以下 *MEW* Ⅴ 略称 J, hrsg. vom Institut für Marxismus - Leninismus beim ZK der SED, Berlin 1956, Bd.1, S.377.
- (2) Friedrich Engels, Revolution und Konterrevolution in Deutschland, *MEW*, Bd.8, S.50.
- (3) Karl Kautsky, Nationalität und Internationalität, in: *Ergänzungshefte zur Neuen Zeit*, Nr.1, Stuttgart 1907/1908, S.7.
- (4) Otto Bauer, *Die Nationalitätenfrage und die Sozialdemokratie*, Wien 1924, S.379. ユダヤ人問題に対するバウアーの態度に関しては拙稿「オットー・バウアーとユダヤ人問題」、『慶応義塾経済学会編『三田学会雑誌』二〇一三年一〇六卷三号を参照されたい。
- (5) Edmund Silberner, *Sozialisten zur Judenfrage*, Berlin 1962, S.290.

- (6) *Ebd.*
- (7) Shlomo Nāman, Social Democracy on the Ambiguous Ground between Antipathy and Antisemitism: The Example of Wilhelm Hasenclever. in: *Leo Baeck Institute Year Book* [ユダヤ LBIB ] Vol.36, London / Jerusalem / New York 1991, p.229.
- (8) Nāman, Die Judenfrage als Frage des Antisemitismus und des jüdischen Nationalismus in der klassischen Sozialdemokratie. in: *Juden und deutsche Arbeiterbewegung bis 1933. Soziale Utopien und religiös-kulturelle Traditionen*, hrsg. von Ludger Heid und Arnold Paucker, Tübingen 1992, S.50.
- (9) Robert S. Wistrich, Socialism and Judeophobia - Antisemitism in Europe before 1914, *LBIB*, Bd.37, 1992.
- (10) Jack Jacobs, *On Socialists and „The Jewish Question“ after Marx*, New York / London 1992, p.3.
- (11) Reinhard Rürup, Sozialismus und Antisemitismus in Deutschland vor 1914, in: *Juden und jüdische Aspekte in der deutschen Arbeiterbewegung 1848-1918*, hrsg. von Walter Grab, Tel-Aviv 1977, S.222.
- (12) Eduard Bernstein, Die demokratische Staatsidee und die jüdisch-nationale Bewegung. in: ders., *Ich bin der Letzte, der dazu schweigt. Texte in jüdischen Angelegenheiten*, hrsg. von Ludger Heid, Berlin 2004 [ユダヤistische Texte], S.256.
- (13) Kautsky, Die Aussichten des Zionismus, in: *Arbeiter-Zeitung*, Nr.262 vom 22. September, Wien 1929.
- (14) Bernstein, Die Aussichten des Zionismus. Eine Antwort an Karl Kautsky, *Jüdische Texte*, S.259.
- (15) Konferenz der Poale-Zion in Deutschland, in: *Der jüdische Arbeiter*, 7.Jg., Nr.2 vom 17. Jänner, Wien 1930.
- (16) Nāman, Die Bedeutung der Judenfrage in der frühen Arbeiterbewegung, in: *Tel Aviver Jahrbuch für deutsche Geschichte*, Bd.20, Tel Aviv 1991, S.169.
- (17) Wistrich, Eduard Bernsteins Einstellung zur Judenfrage, in: *Juden und deutsche Arbeiterbewegung bis 1933*, a.a.O., S.79.
- (18) Ludger Heid, Eduard Bernstein - eine Annäherung an sein Judentum, *Jüdische Texte*, S.31.
- (19) Engels, Der demokratische Panславismus, *MEW*, Bd.6, S.275. 「歴史なる民」の問題については Roman Rosdolsky, Friedrich Engels und das Problem der „geschichtslosen“ Völker: Die Nationalitätenfrage in der Revolution 1848-1849 im Licht der „Neuen Rheinischen Zeitung“, in: *Archiv für Sozialgeschichte*, Bd.4, Hannover 1964. 良知力「四八年革命における歴史なき民によせて」『向く岸からの世界史』未来社一九七八年を参照されたい。
- (20) この点に関しては拙稿「マルクス、エンゲルスにおける人間的解放と民族問題 — アルノルト・ルーゲとの比較を中心に」, 神田順司編『社会哲学のアクチュアリティ』未知谷二〇〇九年を参照された。
- (21) Rürup, *Emanzipation und Antisemitismus. Studien*

- zur „Judenfrage“ der bürgerlichen Gesellschaft, Göttingen 1975, S.80.
- (22) *Ebd.*, S.85.
- (23) Heinrich von Treitschke, Unsere Aussichten, in: *Preussische Jahrbücher*, Bd.44, Berlin 1879, S.573.
- (24) Wilhelm Marr, *Der Sieg des Judenthums über das Germanenthum*, Bern 1879, S.9.
- (25) Jakob Segall, Die Zahl der Juden in Deutschland nach der Volkszählung vom 1. Dezember 1910, in: *Zeitschrift für Demographie und Statistik der Juden* [≡ *ZDSJ*] 8.Jg., Berlin 1912.
- (26) Rudolf Wassermann, Die Entwicklung der jüdischen Bevölkerung in der Provinz Posen und das Ostmarkenproblem, *ZDSJ*, 6.Jg., 1910, S.70.
- (27) Gabriel Alexander, Die Entwicklung der jüdischen Bevölkerung in Berlin zwischen 1871 und 1945, in: *Teil Aviner Jahrbuch für deutsche Geschichte*, Bd.20, Teil Aviv 1991, S.289ff.
- (28) Arthur Prinz, *Juden im Deutschen Wirtschaftsleben. Soziale und wirtschaftliche Struktur im Wandel 1850-1914*, Tübingen 1984, S.141.
- (29) *Ebd.*, S.134.
- (30) *Ebd.*, S.80.
- (31) Treitschke, Unsere Aussichten, a.a.O., S.572.
- (32) Marr, *Der Sieg des Judenthums über das Germanenthum*, aa.O., S.41.

エドゥアルト・ブルンシュタインとユダヤ人問題

- (33) *Ebd.*, S.15.
- (34) *Ebd.*, S.32.
- (35) Vgl. Hans Rosenberg, *Grosse Depression und Bismarckzeit*, Berlin 1967, S.88ff.
- (36) ラインハルト・リューロップが指摘しているように、ユダヤ人迫害を意味する Antisemitismus という概念が初めて用いられたのは、「反セム主義的 antisemitisch な週刊紙」の刊行に言及した一八七九年九月二日の「ユダヤ一般新聞」である。 *Allgemeine Zeitung des Judentums*, 43.Jg., Nr.36 vom 2.Sept. Leipzig 1879. ただし antisemitisch という語は一八六五年に出版された『国家辞典』にも用例が見出される。これを引き合いに出して伊藤定良は「当時すでに、その用語に見合うような現象ないしは運動が生まれていた」と述べているが、このような主張は勇み足であるように思われる。『国家辞典』における用例はまったく文脈が異なるからである。そこでは古代セム諸民族の国家制度が説明されており、本来自由な砂漠の民であったセム系諸民族は共和制を理想として、「ユダヤ人の下における王国」とりわけ「世襲の王国」は「非セム的」antisemitisch だと述べられていることである。このような用例は現実の運動の反映であるというよりもリューロップが指摘しているように、「偶然」であったと考えられるであろう。G.Weil, *Semitische Völker*, in: *Das Staats-Lexikon. Encyclopaedie der sämtlichen Staatswissenschaften für alle Stände*, hrsg. von Karl von Rotteck, Karl Welcker, dritte Auflage, Bd.14, Leipzig 1865, S.328.

二八七 (二八七)

- 伊藤定良『ドイツの長い一九世紀——ドイツ人・ポーランド人・ユダヤ人』青木書店二〇〇二年、一二〇頁。
- Rürup, *Emanzipation und Antisemitismus*, aaO., S.95ff.
- (37) Jacob Toury, *Die politischen Orientierungen der Juden in Deutschland*, Tübingen 1966, S.122.
- (38) *Ebd.*, S.124.
- (39) *Ebd.*, S.175.
- (40) Marr, *Der Judenkrieg, seine Fehler und wie er zu organisieren ist*, Chemnitz 1880, S.15.
- (41) Adolf Stoecker, Sozialdemokratisch, Sozialistisch und Christlich-Sozial, in: ders., *Christlich-Sozial, Reden und Aufsätze*, Bielefeld / Leipzig 1885 [1874] CS I, S.333.
- (42) Stoecker, Einleitung, CS, S.XXXIV.
- (43) Stoecker, Programm der christlich-sozialen Arbeiterpartei, CS, S.21/22.
- (44) Stoecker, Einleitung, CS, S.XVI.
- (45) Peter Pulzer, *The Rise of Political Anti-Semitism in Germany & Austria*, Revised Edition, Cambridge / Massachusetts 1988, p.87.
- (46) Stoecker, Programm der christlich-sozialen Arbeiterpartei, CS, S.21.
- (47) Stoecker, Des Handwerks Not und Hilfe, CS, S.33/34.
- (48) Stoecker, An die Wähler Berlins! CS, S.135/136.
- (49) Günter Brakelmann, Adolf Stoecker und die Sozialdemokratie, in: Günter Brakelmann, Martin Greschat, Werner Jochmann, *Protestantismus und Politik. Werk und Wirkung Adolf Stoeckers*, Hamburg 1982, S.101.
- (50) Stoecker, Des Handwerks Not und Hilfe, CS, S.37.
- (51) Stoecker, An die Wähler Berlins! CS, S.137.
- (52) Stoecker, Unsere Forderungen an das moderne Judentum, CS, S.149.
- (53) *Ebd.*, S.152.
- (54) Stoecker, Die Anfänge der antijüdischen Bewegung in Berlin, in: ders., *Reden und Aufsätze*, hrsg. von Reinhold Seeberg, Leipzig 1913, S.150.
- (55) Stoecker, Das unzweifelhaft Berechtigte, Edle und Notwendige der gegenwärtigen antijüdischen Bewegung, CS, S.183.
- (56) Stoecker, Zur Handwerkerfrage, CS, S.340.
- (57) *Ebd.*, S.352.
- (58) *Ebd.*, S.350.
- (59) Stoecker, Notwehr gegen das moderne Judentum, CS, S.167.
- (60) Stoecker, Prinzipien, Thatsachen und Ziele in der Judenfrage, CS, S.196/197.
- (61) Kurt Wawrzinek, *Die Entstehung der deutschen Antisemitenparteien (1873-1890)*, Berlin 1923, S.38.
- (62) Der Umschwung in Berlin, in: *Allgemeine Zeitung des Judenthums*, 45.Jg., Nr.4, 25. Januar 1881.
- (63) Sozialpolitische Rundschau, in: *Der Sozialdemokrat*, [1874] SD I Nr.5, 30.Januar, Zürich 1881.
- (64) X.Y., Stöcker's Verdruß oder der Hofprediger in

- tausend Aengsten, *SD*, Nr.14, 3.April 1881.
- (19) Pulzer, *The Rise of Political Anti-Semitism in Germany & Austria*, a.a.O., p.93.
- (20) Stoecker, Einleitung, *CS*, S.XLIII.
- (21) Eine kaiserliche Botschaft und eine sozialdemokratische Antwort, *SD*, Nr.48, 24.November 1881.
- (22) Ursula Reuter, *Paul Singer (1844-1911). Eine politische Biographie*, Düsseldorf 2006, S.95.
- (23) *Ebd.*, S.96.
- (24) *Ebd.*, S.98.
- (25) *Protokoll über die Verhandlungen des Parteitages der Sozialdemokratischen Partei Deutschlands, Abgehalten zu Köln a. Rh. vom 22. bis 28. Oktober 1893*, Berlin 1893 [ ㄩㄴ- Köhner Parteitag I, S.223/224.
- (26) *Ebd.*, S.233/234.
- (27) *Ebd.*, S.224.
- (28) Paul W. Massing, *Rehearsal for Destruction. A Study of Political Anti-Semitism in Imperial Germany*, New York 1949, p.151.
- (29) Rürup, *Emanzipation und Antisemitismus*, a.a.O., S.111.
- (30) Wistrich, German Social-Democracy and the Berlin Movement, in: *Internationale wissenschaftliche Korrespondenz zur Geschichte der deutschen Arbeiterbewegung*, 12.Jg., Heft4, 1976, S.441.
- (31) Rosemarie Leuschen-Seppel, Arbeiterbewegung und Antisemitismus, in: *Antisemitismus. Von religiöser Judenfeindschaft zur Rassentheologie*, hrsg. von Günter Brakelmann / Martin Rosowski, Göttingen 1989, S.90.
- (32) *Kölnher Parteitag*, S.228.
- (33) Wilhelm Liebknecht, Nachträgliches zur „Affaire“, in: *Die Fackel*, Nr.18, Wien 1899, S.1.
- (34) Der Umschwung in Berlin, a.a.O.
- (35) *Correspondent für Deutschlands Buchdrucker und Schriftgießer*, 19.Jg., Nr.9, 21. Januar, Leipzig 1881.
- (36) Franz Mehring, Anti- und Philosemitismus, in: *Die Neue Zeit*, [ ㄩㄴ- NZ ] 9.Jg., Bd.2, 1890/91, S.587.
- (37) Verhandlungen und Beschlüsse des Internationalen Arbeiter-Kongresses zu Brüssel, in: *Congrès International Ouvrier Socialiste, tenu a Bruxelles du 16 au 23 Août 1891*, Genève 1977, S.285.
- (38) Abraham Cahán, *Bleter fun mogn leben*, Bd.3, New York 1926, S.162/163.
- (39) Verhandlungen und Beschlüsse des Internationalen Arbeiter-Kongresses zu Brüssel, a.a.O., S.298.
- (40) Sozialpolitische Rundschau, *SD*, Nr.2, 2.Januar 1881.
- (41) *Rede des Reichstagsabgeordneten Wilhelm Liebknecht über den Kölnher Parteitag mit besonderer Berücksichtigung der Gewerkschaftsbewegung, abgehalten zu Bielefeld am 29. Oktober 1893*, Bielefeld 1893, S.28.
- (42) [Mehring] Das erste Wahlergebnis, *NZ*, 11.Jg., Bd.2, 1892/1893, S.389.

- (86) Engels, Über den Antisemitismus, *MEW*, Bd.22, S.49ff. オーストリア社会民主党の支持者エーレンフロイントは反セム主義を「愚者の社会主義」と看做し、反セム主義者が「ユダヤ資本に対してだけである」として資本に対する憎悪を植えていているが、その果実は結局プロレタリアートの懐に転がり込むだろう」と述べていた。エンゲルスの書簡はこれに対する返答であった。
- John Bunzl, Arbeiterbewegung und Antisemitismus in Österreich vor und nach dem Ersten Weltkrieg, in: *Zeitgeschichte*, 4.Jg., Heft 5, Wien 1977, S.163.
- (86) Engels an Bebel, 19. November 1892, *MEW*, Bd.38, S.518.
- (16) Bernstein, *Von 1850 bis 1872. Kindheit und Jugendjahre*, Berlin 1926, S.40.
- (26) *Ebd.*, S.41.
- (33) Bernstein, Wie ich als Jude in der Diaspora aufwuchs, in: *Der Jude*, 2.Jg., Berlin / Wien 1917/1918, S.188.
- (47) *Ebd.*, S.190.
- (56) *Ebd.*, S.188.
- (59) *Ebd.*, S.190/191.
- (75) Bernstein, *Von 1850 bis 1872*, aa.O., S.87.
- (86) Peter Gay, *Das Dilemma des demokratischen Sozialismus. Eduard Bernsteins Auseinandersetzung mit Marx*, Nürnberg 1954, S.17.
- (86) Bernstein, *Von 1850 bis 1872*, aa.O., S.164.
- (101) Bernstein, *Sozialdemokratische Lehrjahre*, Berlin 1928, S.58.
- (101) *Die Lösung der Judenfrage. Eine Rundfrage*, hrsg. von Julius Moses, Berlin / Leipzig 1907, S.49/50.
- (20) Bernstein, Das Schlagwort und der Antisemitismus, *NZ*, 11.Jg., Bd.2, 1892/93, S.236/237.
- (30) *Die Lösung der Judenfrage*, aa.O., S.49.
- (40) Bernstein, *Die Aufgaben der Juden im Weltkrieg*, Berlin 1917, S.32.
- (90) Jacobs, *On Socialists and „The Jewish Question“ after Marx* aa.O., p.197.
- (90) Arno Herzig, The Role of Antisemitism in the Early Years of the German Workers' Movement, *LBYYB*, Vol. 26, 1981, p. 248ff.
- (70) Bernstein, *Sozialdemokratische Lehrjahre*, aa.O., S.26.
- (80) Bernstein, Zur Abwehr, in: *Der Volksstaat*, Nr.15, 19. Februar, Leipzig 1873.
- (80) [Carl Wilhelm Tröckel], Aus Westdeutschland, *SD*, Nr.40, 29. September 1881.
- (101) Bernstein, *Sozialdemokratische Lehrjahre*, aa.O., S.52/53.
- (111) Bernstein, Wie ich als Jude in der Diaspora aufwuchs, aa.O., S.194.
- (121) Engels an Bernstein, Bridlington Quay, 17. August 1881, in: *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Friedrich Engels* [資料 EBBFE], hrsg. von Helmut Hirsch, Assen

1970, S.28.

(51) Bernstein an Engels, Zürich, 9. September 1881, *EBBFE*, S.37.

(51) Bernstein an Engels, Zürich-Fluntern, 23. Juli 1881, *EBBFE*, S.28.

(51) Bernstein an Engels, Zürich, 9. September 1881, *a.a.O.*, S.37.

(91) [Bernstein], *Die Verjüdung des deutschen Reiches*, *SD*, Nr.2, 9. Januar 1881. この論評は「は」で文字通りに解釈されてきた。シルバーナーはこの論評を引き合いに出し、社会民主党が「ユダヤ、ユダヤ化、ユダヤ人」という言葉を搾取、欺瞞、詐欺を表すために利用していた」と主張し、ウイストリッチは「ユダヤ人と資本家を同義語として用いることは反セム主義の語法を俗物的に模倣することである」と批判している。また近年ではハイトが「ドイツ帝国のユダヤ化」という見出しは「決して皮肉ではない」とし、その議論は「あからさまに人種主義的」であると述べている。Silberner, *Sozialisten zur Judenfrage*, a.a.O., S.200; Wistrich, *German Social Democracy and the Berlin Movement*, *a.a.O.*, S.436; Heid, *Eduard Bernstein – eine Annäherung an sein Judentum*, *Jüdische Texte*, S.24. (この論評は、ローゼンローイシエン・ゼツェルが指摘してゐるように、「反セム主義的煽動の偽善と虚偽を暴露」したものと理解するべきであろう。アルノ・ヘルツィヒも、この論評は「ボスマルク時代の偽善を嘲笑した」と解釈してゐる。Rose-

エドゥアルト・ベルンシュタインとユダヤ人問題

marie Leuschen-Seppel, *Sozialdemokratie und Antisemitismus im Kaiserreich. Die Auseinandersetzung der Partei mit den konservativen und währischen Strömungen des Antisemitismus 1871-1914*, Bonn 1978, S.96; Herzig,

The Role of Antisemitism in the Early Years of the German Workers' Movement, *a.a.O.*, p.258.

(17) Bernstein, *Wie ich als Jude in der Diaspora aufwuchs*, *a.a.O.*, S.194.

(18) [Bernstein], *Sozialpolitische Rundschau*, *SD*, Nr.6, 6. Februar 1881.

(11) [Bernstein], *Karl Marx über die Judenfrage*, *SD*, Nr.27, 30.Juni 1881. ナymanが指摘してゐるように、ユダヤ教を離脱したばかりのベルンシュタインにとって、マルクスの論文は社会主義と反セム主義の区別を明確にするだけなく、「ユダヤ教改革派の自由主義」と決着をつけるという意味も持っていた。Nayman, *Marxismus und Zionismus*, Gerlingen 1997, S.82.

(20) Shulamit Volkov, *The Immunization of Social Democracy against Anti-Semitism in Imperial Germany: in: Juden und jüdische Aspekte in der deutschen Arbeiterbewegung 1848-1918*, a.a.O., S.63ff.

(21) Bernstein an Engels, Riesbach, 1. September 1882, *EBBFE*, S.123.

(22) Bernstein an Engels, Fluntern / Zürich, 12. Januar 1882, *EBBFE*, S.66.

(23) Bernstein an Engels, Riesbach, 10. November 1883,

- EBBFE*, S.228.
- (124) Laurenz Demps, Paul Singer, soziale Utopie, Judentum und Arbeiterbewegung, in: *Juden und deutsche Arbeiterbewegung bis 1933*, aa.O., S.109.
- (125) Reuter, *Paul Singer (1844-1911)*, aa.O., S.115.
- (126) Wilhelm Liebknecht, Zur Wahlkritik, *SD*, Nr.32, 7. August 1884.
- (127) Bernstein an Engels, Zürich, 18. August 1884, *EBBFE*, S.292/293. 「国家社会主義者」は「ユテッカー派を指している。彼らは Der Staats-Socialist という機関紙を発行していた。」
- (128) Bernstein, Das Schlagwort und der Antisemitismus, *aa.O.*, S.233/234. 「ユテッカーはベルンシュタインの主張に關するウイストリッチの解釈には首を傾げざるを得ない。ウイストリッチによれば、「親セム主義」を批判するユダヤ人社会民主主義者をベルンシュタインは「非難」したという。しかし実際にはベルンシュタインは彼らを「尊重する」と述べているのである。それは彼らの振舞いが「過剰」とは見え「誠実さ」に由来すると考えていたからである。ウイストリッチの解釈はベルンシュタインの見解をあらかじめ歪めるものと言えよう。しかもウイストリッチはユダヤ人社会民主主義者による「親セム主義」批判を「マゾヒスト的態度」と呼んでいる。このような発言は、「ベルンシュタインがユダヤ人社会主義者の「過剰な誠実さ」の背景に読み取った「感情との葛藤」をウイストリッチが理解していないということを示している。
- 9° Wistrich, Eduard Bernsteins Einstellung zur Judenfrage, *aa.O.*, S.83.
- (129) [Mehring], Das erste Wahlergebnis, *aa.O.*, S.388/389.
- (130) Bernstein, Das Schlagwort und der Antisemitismus, *aa.O.*, S.234/235.
- (131) [Eduard], [Rezension] Der Antisemitismus und die Juden im Licht der modernen Wissenschaft. Von C. Lombroso, *NZ*, 12Jg., Bd.2, 1893/1894, S.406.
- (132) Bernstein an Kautsky, 2. Mai 1893, in: *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Karl Kautsky (1891-1895)*, hrsg. von Till Schelz-Brandenburg, Frankfurt am Main 2011, S.190.
- (133) Bernstein, Eleanor Marx, *NZ*, 16Jg., Bd.2, 1897/1898, S.122.
- (134) Bernstein, Das realistische und das ideologische Moment im Sozialismus, *NZ*, 16Jg., Bd.2, 1897/1898, S.232.
- (135) Bernstein, Das Schlagwort und der Antisemitismus, *aa.O.*, S.233.
- (136) Bernstein, *Aus den Jahren meines Exils. Erinnerungen eines Sozialisten*, Berlin 1918, S.120.
- (137) Bernstein an Engels, Pluntern, 17. Februar 1882, *EBBFE*, S.77.
- (138) Engels an Bernstein, London, 22./25. Februar 1882, *EBBFE*, S.81.
- (139) Bernstein an Engels, Pluntern, 27. April 1882,

EBBFE, S.91.

- (95) Rosa Luxemburg, Neue Strömungen in der polnischen sozialistischen Bewegung in Deutschland und Oesterreich. NZ, 14.Jg., Bd.2, 1895/1896, S.180.
- (97) *Ebd.*, S.178.
- (98) Kautsky, Finis Poloniae? NZ, 14.Jg., Bd.2, 1895/1896, S.516/517.
- (99) *Ebd.*, S.521.
- (100) Kautsky an Bernstein, Stuttgart, 2 Juni 1896, in: *Eduard Bernsteins Briefwechsel mit Karl Kautsky (1895-1905)*, hrsg. von Till Schelz-Brandenburg, Frankfurt / New York 2003 | ㄷㄴ EBBKK1895], S.154ff.
- (101) Bernstein an Kautsky, 6. Juni 1896, EBBKK1895, S.160.
- (102) Bernstein, Die deutsche Sozialdemokratie und die türkischen Wirren, NZ, 15.Jg., Bd.1, 1896/1897, S.110/111.
- (103) Hans Mommsen, Nationalismus und nationale Frage im Denken Eduard Bernsteins, in: ders., *Arbeiterbewegung und Nationale Frage*, Göttingen 1979, S.114.
- (104) Wistrich, Eduard Bernstein und das Judentum, in: *Bernstein und der Demokratische Sozialismus. Berichte über den wissenschaftlichen Kongress „Die historische Leistung und aktuelle Bedeutung Eduard Bernsteins“*, hrsg. von Horst Heimann / Thomas Meyer, Berlin / Bonn 1978, S.158.
- (105) Marx, Ökonomisch-philosophische Manuskripte,

MEN, Bd.40, S.521.

- (106) Bernstein, *Die Voraussetzungen des Sozialismus und die Aufgaben der Sozialdemokratie*, Stuttgart 1899 | ㄷㄴ Voraussetzungen ㄲ ㄷ ㄴ 1, S.28.
- (107) Bernstein, Einige Klippen der Internationalität, in: *Sozialistische Monatshefte* | ㄷㄴ SM ㄲ ㄷ ㄴ 1, 5.Jg., Bd.1, Berlin 1901, S.255.
- (108) *Ebd.*, S.256.
- (109) Kautsky, Die moderne Nationalität, NZ, 5.Jg., 1887, S.448.
- (110) Bernstein, *Voraussetzungen*, aa.O., S.144.
- (111) Bernstein, Fragen der Taktik in Russland, SM, 10.Jg., Bd.1, 1906, S.213.
- (112) Bernstein, *Voraussetzungen*, aa.O., S.123.
- (113) *Ebd.*, S.124.
- (114) *Ebd.*, S.125.
- (115) *Ebd.*, S.127.
- (116) Bernstein, Der Schulstreit in Palästina, NZ, 32.Jg., Bd.1, S.752.
- (117) *Central Verein Zeitung*, 9.Jg., Nr.1, 3. Januar, Berlin 1930.
- (118) Die Amsterdamer Sozialistenkonferenz und die jüdischen Forderungen, in: *Jüdische Rundschau*, Nr.33 vom 9. Mai, Berlin 1919.
- (119) Bernstein, Für das arbeitende Palästina, *Jüdische Texte*, S.258.

史 学 第八卷 第一一三号 文学部創設二二五年記念号 (第二分冊)

二九四 (二九四)

(164) *Central Verein Zeitung*, 9.Jg., Nr.1, 3. Januar 1930.